

最高のCTB

下記の記事（朝日新聞）の内容は猛省を促しています。ラグビーのプレーについて豊かな知識と経験がない人にとっては、明確に理解できない内容を含んでいるからです。

「前半のトライは、パスをもらう前に外へ開いて内に切れ込んだ」

「後半は球を受ける瞬間に開き、一人外側の相手を釣ってからのパスでトライを生んだ」

「175センチ、94キロ。体格に恵まれた方ではない。すれ違いざまに防御を「ずらす」」

まず、以上の3点に気付いた人がどれだけいただろうか疑問に思います。歴代日本代表のCTBと比較してみてください。フットワークも未熟で、突進力だけのプレーヤーがいました。選抜基準の問題というよりも、そのような動きを教えられていないことが原因のようです。基本的知識の欠如の一つとして、ボールを持って外側を走り抜けるプレーを cut out と呼び、スイッチパスなどから内側を走り抜けるのを cut in と呼んでいるといった間違いに始まります。cut out も cut in もパスの線上でのキャッチ地点の問題です（図参照）。

マークに位置する相手の外側を抜くと見せかけて内へ切れこむのです。また、正面に突っ込むと見せかけて外に開き、更に一步外へ踏み込んで外側の相手に内への体重移動をとらせてから外を抜く構えにある味方にパスして突破させるのです。

マコーミック選手の優れた点は「タックル後の立ち上がり早い」とことと「キャッチングの位置で抜く」という2つを指摘したことがあります。あの身体でよく活躍できたのはそれだけの技があったということです。大畑選手も外側突破の位置取りとスピードが優れた才能を発揮します。しかし、CTB に即通用するものではありません。釜石の森重隆が面白いCTBだと楽しく観戦したことがあります。ずっと以前にNZか大型No.8をCTBコンバートしたことがあります。接点でモールの核としての働きを求めたものでした。「前へ」と「接点で勝つ」ことで頭が一杯のようです。ラグビーの面白さには「横へ」と「ずらす」ということもあるのです。

世界最高のCTBとも称される28歳のW杯が終わった。アイルランドのオドリスコル。肉体的に戦った大会だった。開幕前の試合ではお骨が折れた。

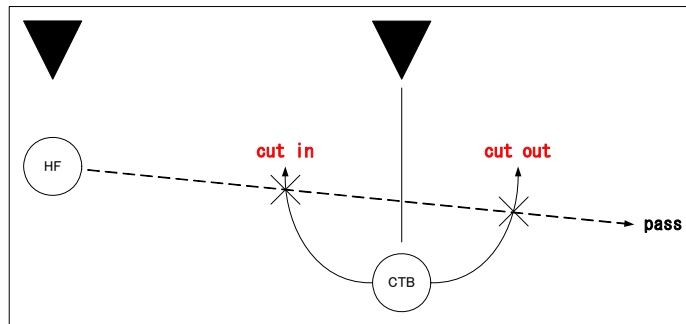
た、大会に入ると練習で右ひざを痛めた。本調子からはほど遠かったが、アルゼンチン戦で意地の輝きを放った。

前半のトライは、パスをもらう前に外へ開いて内に切れ込んだ。後半は球を受ける瞬間に開き、一人外側の相手を釣ってからのパスでトライを生んだ。175センチ、94キロ。体格に恵まれた方ではない。すれ違いざまに防御をずらすため、究めてきた動きが凝縮されていた。

「もう空に帰らなくてはいいない。残念。同感だ。日本陣にも参考となるプレー。もっと見たかった。」

（中川文雄）

朝日新聞（2007年10月2日朝刊）より転載



cut in & cut out 図

2007. 10. 21

西川 義行